
転生者はあの子の味方

草野 瀬津璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者はあの子の味方

【Nコード】

N9969X

【作者名】

草野 瀬津璃

【あらすじ】

エルルミス教会の教会領リツテベルド、そこであたしは嫌われ者のあの子に会って、味方になるって決めた。男らしい魔女の“あたし”視点でえがく、嫌われ者の女の子ベルとのお話。死亡後のゲーム内への転生者もので、こういうのあったら面白いかもと即興で作ってみた話です。短編というか、主人公の独り言かもしれない。ほぼ書き下ろし。

ふわふわの茶色い髪に、ぱつちりした琥珀色の目。肌は白くて、つやつやした桜色の唇。

小柄なあの子は、可愛らしい女の子だ。

初めて見た時、天使だと思ったあたしは、あの子を守ると決めたのだ。

エルルミス教会の教会領の一つであるリツテベルド、そこにある小さな村があたし アレックス・レーレンの生まれ育った村だ。教会領は広く、森となだらかな丘陵が広がる土地だ。気候は温暖で住み心地は良い。

領内に住む農民は、教会から土地を貸し与えられている小作人という立場で、薬師をしているあたしの家もそうである。十五歳以上は、週に三日、本領 教会敷地内の仕事を手伝いに行き、領内に住む代わりに耕作しなくてはいけない直営地の管理と、それ以外は自分達に与えられた土地内の畑に精を出す。領内にあるミエスの森は、教会が大事に管理しているので、そこから薪を運ぶ代わりに、一年に一度、あたし達の村から荷車一台分の材木を運ばねばならず、更には森で豚を放し飼いにする権利を得る代わりに、葡萄酒を大樽で二つ納め、直営地で羊に草をはませる権利として、三年に一度、羊を一家で一頭納めなくてはいけない。それから、人頭税が一年で一人銀貨四枚だ。

他にも細々と納税しなくてはいけないこともある。

なんでこんなことを言うかっていうと、ようは忙しいということを言いたいのだ。

外から来た人や冒険者なんかは、のどかでのんびりした良い村です。ね、なんて言うけれど、結構忙しいのだ。余暇は自分の土地の畑を耕すのに忙しいし、うちは薬師をしている分、人頭税を減らしてもらおう代わりに薬を納入している。

教会領内に住んでいるからといって、信仰深いわけでもないあたしからすると、僧の幾らかは鼻について嫌いなのだが、それでもリッテベルドの教会のトップである僧院長のフェルナンド様は、本当に素晴らしい方なので、そりゃあもう下っ端どもが霞む霞むそこはとても誇らしい。それに、貴族の統括している領から、たまに凄惨な話が聞こえてくるのを聞く限り、この村は人道的で優しい方みたいである。

そんな人道的で優しい村にも、嫌われ者というのが存在する。それがあたしの親友、ベルガモット・ホルスだ。元々余所者である元冒険者の両親をもち、二年前の“赤月の夜の惨劇”で両親を亡くした女の子だ。赤月の夜の惨劇は、岩トカゲという魔物が領地を群れで襲ってきて、教会にいる僧達や腕に覚えのある村人が束になつてかかったのに、十名もの死者を出した日のことだ。岩トカゲっていうのは、固い皮膚をしているので厄介な魔物なのだ。その皮は高値で売れるけれど、それよりも犠牲の方が大きかった。

僧は学がある分、魔法を使える人が多いし、自警は僧達と一部の村人で行っているから、そこらの人間より強いのだ。裕福な領地には盗賊も来やすいし、魔物が出る昨今、ただお祈りしているだけで生活出来るほど甘くはないってこと。

話を戻そう。

ベル　ベルガモットのこと　は十四歳で両親を亡くしたのだが、彼女には兄妹はおらず、十五歳以上しか土地を持ってない為に村を追われる寸前だったわけだ。しかし僧院長とベルの父親が懇意にしていたのと、領地を守った両親の功績を称えて、一年間だけ税を免除し、継続して土地に住む権利を与えたのだ。

勿論、他にも死んだ村人の家族の税は幾らか免除したのだが、全

部というのは彼女だけで、それをやつかんだ村人達により、嫌われ者になってしまったのである。院長のえこひいきだとか、余所者の娘とか散々な言われようだった。

今までベルとはたまに集会で会うくらいだったけれど、死んだ知人の為に墓参りに行った時に、両親の墓の前に座り込んで泣いている彼女を見かけて、それで知り合ったあたしは、すっかりベルのことが気に入ったのだ。

それに、僧院長が一年間も税を免除した理由が分かった。

線が細くて、痩せた小さな女の子だったからだ。少々發育不良気味らしい。本当に同い年なのかと疑ったくらいだ。

二年経った今は、ベルは女性一人で出来る分の仕事を所領管理人に割り振られ、直営地と自分の土地の畑の管理、本領の手伝い、自分の土地内で育てた鶏を毎年三羽、日曜以外は毎朝卵を届けに行くといった仕事内容になっている。妥当な所だろうと思うが、村人にはそう思えないらしく、何かとケチをつけている。やれ薪を拾うなとか、やれ井戸に来るなとか。

生活出来ないし死ぬだろう、それは。

切れたあたしは、そんなことを言い出した青年を、手近にあった棒切れで殴り飛ばし、この土地は教会の持ち物であんたにそんなことと言う権利はない、越権行為で訴えるぞと脅してやった。ふふん、あの青い顔、ざまあみろよ。

いい気味だと思っていたが、青年は単純にあたしにびびってただけらしいと後から友人が教えてくれた。あたしは、リッテベルドの緑の魔女、もとい暴力魔女なんて裏で呼ばれているらしい。前者はともかく後者は何。誰だそんなこと言った奴、今度シメに行くわよ。あたしがベルの味方を始めてからは、だんだんと村人の対応は優しくなってきた。薬師の後継ぎは、一人娘のあたしなのだ。何かあった時に、薬を売ってもらえないのは困るってわけ。やあね、利己主義って。ほんと扱いやすくて困っちゃう。

「ベルー、おはよー。今日はあたし暇だから、仕事手伝うわよ」

そんなこんなで、あたしはベルの家に顔を出した。

おどおどした様子で出てきたベルは、あたしと分かれると相好を崩した。ああもう、小動物みたいで可愛い！

大人しくて口数が少ない子だが、あたしがその分騒がしいから、相対的な騒がしさは変わらないだろう。

あたしはベルの畑の世話を手伝って、持ってきた薬草パイで昼と一緒に取り、直営地の様子を見に行くというベルに付き合っ、葡萄畑の手入れも手伝った。直営地では世話しなくてはいけない範囲はそれぞれ決まっているが、手伝ってはいけないという決まりはない。

「いつもごめんね、アレク」

ベルが申し訳なさそうに首をすくめるのに、

「そこはありがとっつて言うところよ、ベル。あたしが好きでやってんだから、あんたは気にしなくていいの」と、あたしは快活に笑い飛ばす。

ちなみにアレクっていうのは、アレックスという名の愛称だ。村人にも、アルやアレクと呼ばれている。

そんなあたしは、十六にしては胸もあってスタイルもいいのに、まあ日に焼けた肌をしてそばかすはあるけれど、そんなに悪い造作とは思ってない女らしい容姿のはずなのに、男勝りだの、むしろ男だの言われる。長い赤い髪は三つ編みにしているし、スカートだし、どこも男らしくないのに、そこの男より男らしいとか、女に見えるだけで実は男だとか言われる。うん、そのむしろ男呼ばわりした奴と、女に見える云々の奴は、とりあえず両方とも尻を蹴つとばして、水路に落とすとした。

「えへへ、ありがとっ」

「帰る？」

「うん。今日の稽古しなきゃ。サボるとお父さんに怒られちゃう」
小さくて可愛らしい少女であるベルだが、実は剣士でもある。

ベルは剣士である父親と魔法使いである母親を持っていたが、魔

法に才能はなかったし、父親にあこがれて剣を習っていたんだそうだ。ベルの父親は、別に娘を剣士にしたいわけではなく、単に体が弱くて風邪をひきやすかったベルを体力面から鍛える為に稽古をしていたただけだそうだが。

なんだかんだいっても、たくましい村人達だ。ミエスの森に出る程度の、小物の魔物なら、自力で倒して夕飯のおかずにするくらいにはたくましい。それでも女性や子供には危険であるから一人では森には出かけない。であるのに、ベルは一人で出かけて行って、背負子に薪を背負い、縄にネズミの魔物やウサギの魔物をぶら下げて帰ってくることもある。多めに獲った時は、少しでも処遇を良くする為に村長に機嫌取りに渡しに行き、それでも余るようならあたしにもお裾分けに来てくれる。

魔物の肉には税金がつかないので、村人は動物より魔物の肉を食べる。普通においしいので問題ない。動物の肉は祝い事や祭りの時以外は食べない。それでも育てるのは、魔の肉は徳を落とすからと食べない僧達に税として支払う為だ。

「ねえ、ベル」

直営地からの帰り道、あたしは前々から考えていたことを言おうと思った。

「なあに、アレク」

小首を傾げるベル。

可憐とはきつとベルの為にある言葉だ。

こんなに可愛らしいのに、猟になると目付きが変わって怖いことを村人達は知らないだろう。あたしもそれは知りたくなかった。

「一緒に冒険者やらない？」

「えっ!？」

驚いたようだ。ベルの足が止まった。

「ほら、あたし、強いし。あんたも強い方でしょ。実はこの村の剣士内じゃ一番強いでしょ。知ってんのよ、あたし」

「ええ？」

ベルはますます驚いたようだった。動揺したのか、ハサミを入れた籠を持つ手が震えている。顔色も青ざめた。

ベルは必死に隠していたようだが、あたしには通用しないのだ。何せあたしは、死んだ後に記憶を持ったまま、元はゲームだったはずのこの世界に生まれ変わった人間だから。いやあ、物心ついたくらいで記憶を思い出した時はびっくりしたのなんの。ステータス画面が見えたり、レベル上げ出来ちゃったり、魔法の腕もぐんぐん上がったりと。親もびっくりしたらしい。大人しかった娘がいきなり活動的になって、ガキ大将にのし上がったのだから。まっ、大人しくて病気がちになるよりいっか、と、元から結構アバウトな両親は、すぐに慣れたそうだが。

お陰で、じつと見れば対象者の名前とレベルとHPとMP、状態異常が分かるので、人の名前を覚えるのは得意ではないから楽しんでるし、アイテム名も見れば分かるので、薬草採取の時に、似てるけど違うものを探す時に便利だったりする。調査は親に教わったり読書して覚えたから、魔法とかゲームの知識とかは関係ない。合成関係をやるゲームではなかったのだ。冒険するのがメインのゲームだった。

「でもこの村で一番強いのはあたしよ。それは間違いないわね。僧院長様には負けるけど」

レベル20のあたしは、レベル40の僧院長には負ける。というか、あの方が魔物討伐に出れば一発で解決するんじゃないかと思うが、高齢な方だし、仕方ないか。周りも止めるだろう。

そしてベルはレベル15。あたしみたいにゲーム知識もないのに、ここまでレベルが上がっているととなると才能なんだろう。

とはいえ、戦闘力と農作業の効率と生活の力仕事は比例しないから、ベルはか弱い女の一人暮らしてことになる。泥棒ぐらいは撃退出来るだろうが、水汲みや鍬を振るうのはまた違うのだ。

「別に断ったからって、何もしないわよ。単純に、ベルと旅したら楽しそうだなってだけだから」

もちろん、周囲に人がいないのは確認済みだ。でなければ、こんな道端でこの話は出さない。

あたしが何もしないと聞いて、ほっとしたらしい。警戒していたのか、裏切られると思ったのか。あたしもベルへの村人の仕打ちを知っているので、そう思っても仕方ないだろうけれど、少し哀しい。「ごめんね、アレク。でも私、ここを出て行ったら、本当に帰る場所を失くすことになると思うの。お父さんとお母さんが亡くなった後で、それがよく分かった。二人みたいに村を出てどこかに拠点を持つのは、とっても大変なことだって」

ベルはぎゅっと両手を握りしめる。

「アレクが私の友達になってくれたのは、すごく奇跡なことだったというのも分かっている。あのままだったら、村で生活出来なくて、きっと私、放浪者になってた。だから、アレクの助けになるなら、出来るだけそうしたいの。でも、お父さんとお母さんのお墓があるこの村のことは好きだし、帰る場所にしたい」

ベルは琥珀色の目を涙でうるめて、あたしを見た。こんな時なのに、なんて可愛いんだろうと思うあたしは冷たいのかもしれない。というか、普通の男だったら押し倒してるわ、この可愛さ。間違いない。

（あんな目にあっても村が好きなんて、ほんとお人好しで可愛い）
そんな人の良さも、それでも意志を持って断る勇気を持っているのも、どこもかしこも好きだ。根っからの善人で、嘘がつけないところも好き。あたしなんて嘘くらい幾らでもつける。

「分かった。あたしはね、あなたの嫌がることはしないわ。あたしはあなたの味方でいるって決めてるから」

ベルは口を閉ざし、じつとあたしを見た。

「アレク、私、ずっと聞きたかったことがあるの。でも勇気がなくて。どうして私にそんなに優しくしてくれるの？ 両親もいない、誰かの手を借りなきゃ農作業もろくに出来ない、良い所なんか全然ないじゃない」

ベルは今にも泣きそうな顔をしている。

あたしはふふつと男勝りに笑って、ベルの頭をわしわし撫でる。

「まあ、なんていうか、一目惚れみたいなものかしらね？ 墓地であんたを見た時、守ってやんなきゃと思ったのよ。それに、あんたって、大人しくて、口数少なく、黙々と仕事して、文句言わないで耐えて笑顔で過ごして、嘘をつかない。なんかもう、全部あたしと正反対じゃない？ それがいいのよ。全部ひっくるめて好きなの。愛の告白かという中身だが、単なる親愛の情なので、百合とか思った奴は正座するように！」

あたしは照れ笑いして、そっぽを向く。

唾然としていたベルは、ややあつて首を傾げた。

「アレクも嘘つかないでしょ？」

多分、それ以外はその通りだと思ったんだろう。正直者め。ああ可愛い。

「あら。あたしは嘘くらいつくわよ。そりゃあつきまくりよ。笑顔でお世辞だって言えるわよ、内心で罵ってようがね。こういうの、なんていうか知ってる？ 世渡り上手っていろいろ」

あたしはふふんと胸を張る。

「あたしが嘘つかないのは、両親と、親友であるあんただけよ」

ベルの白いかんばせに朱がさした。

「親友って思っくいいの？」

「あら、もしかしてこれで両思い？」

ベルに自信がなかったのなんかお見通しだ。ベルはあの悪夢の一年間で、自分に役立たずで邪魔者という烙印を押しただ。それで色んなものに対する自信がなくなった。

あたしがおどけて笑ったら、あろうことかベルはぼろぼろ泣きだした。

「ありがとう。アレク！」

がばつとベルはあたしに抱きついてきた。

ここだけ見てたら、さも男の恋人に抱きついた女の子だろう。ア

レックスは女名だが、アレクというのが男名なのは知っている。それに地方によつてはアレックスも男名だ。影で、名前だけでなく本当に男らしいと思われているのも知ってる。それを口に出した奴は、男だった場合は水路か肥溜めに蹴り入れるけどね。女だった時は、笑つてない目で見る。するとたいいていあっちから謝ってくる。

「ねえねえベルちゃん、もし、帰る場所を確保したまま、もちろん精神的にも、それで旅に出れる案があるって言ったなら、ついてきてくれる？」

あたしはベルの背中をぽんぽんと叩きつつ、小声で訊いてみた。

「へ？」

身を離し、きよとんと目を丸くするベル。琥珀色の目から、涙の粒が落つこちる。

あたしはそんな天使に、にやりと悪魔の笑いを浮かべてみせた。

筋書きは簡単。

あたしが適当にトレインしてきたオオカミの魔物の群れを、村にぶつけるだけ。薬草の採取中に群れに出くわして逃げてきたと言いふらす。

あたしでも対処出来ない魔物に、僧や村人は恐れつつも隊を組んで撃退に来る。

あたしももちろん参戦するが、手を抜いた上で怪我までする。

そこに、あたしの危機にと駆け付けるベル！

不慣れながらも、一緒に魔物を蹴散らす。

タッグ組んで、そこそこの活躍をする。

流石、元冒険者の娘だとベルに感心する皆。しかしベルは、怖かったといつてあたしに抱きついて泣きだす。

怖いのに助けようと来たのだと知り、印象を変える村人達。

そして、その後、村の皆が集まる集会で、あたしはもつと強くなりたいから冒険者になると宣言する。ベルは役に立たないかもしれない

ないけど手伝いたいと出てくる。

あたしは、その短慮を皆の前で怒る。村人の非道さを思い出せ、と、村人達の前で言う。罪悪感にさいなまれる村人達。そこへ居合わせた僧が、家はそのままでもうにか出来ないか上に掛け合おうと言いついで出す。

僧院長、一年間に決まった税金を納めるなら、出稼ぎという形で村を出ても良いと許可をくれる。

堂々と村を出ていけるって筋書き。

もちろん、僧院長は先にあたしが説得し、茶番に付き合ってもらうことにする。

この茶番の内容にベルは信じられない顔をしたが、それで上手くいくなるとオーケーをくれた。一緒に行きたいのは本音だそうだ。そしてあたしは、僧院長にさっそく会いに行った。

実はこの計画で一番大変だったことは、二人きりで僧院長様に会うことだった。領内で一番偉い人、つまり他領なら領主に当たるお方だ。色々策をろうして苦労したのに、ベルの名前を出したら、即座に会えた。なんだったんだ、あの努力はと思っていたら、僧院長はベルにそれはもう甘かった。チョコレートに生クリームをかけた上に粉砂糖をかけたくらいに甘かった。なんでも、あたしも話して初めて知ったのだが、ベルは僧院長の亡き親友の孫娘で、本当の孫娘のように思っていたらしい。ベルのことは気にかけていたが、こちらから口を出すと、また鼻唄だと言われかねないということで見守るしかなかったらしい。

まあ、あんな可愛い娘が親友の孫なら、そりゃ可愛がりますわ。あたしも全面的に同意した。

そういうわけで、ベルの待遇が良くなるならと僧院長は茶番に乗るのを喜んで買って出てくれた。もちろん、税金の件は約束させられたが。ついでに、民衆に紛れて同情する役の僧もゲット。

それでどうなったかって？

ええ、そりゃもう。ふふふ、笑えるくらい上手くいったわよ。

村を出た後、村からだいぶ離れた所まで来て、人けがないのを確認して、大爆笑したくらいだったわ。ベルは上手く行き過ぎて怖いって言ってた。素直に喜ばいいのに。

そんなこんなで冒険者として旅立ったあたしとベルは、世界中と一緒に旅して、そこそこ名が通るようになった。

ベルはその可憐な容姿と剣の腕で、剣の舞姫なんて言われたり、あたしはこういうわけか、リッテベルドの緑の魔女が通り名として定着したりした。誰だそのお前、赤の悪魔とか、格闘派魔法使いとか言った奴、ぶん殴って橋から吊るすわよ。ええ、ごほん。まあそんな感じ。薬師としても腕がいいから、結構稼がせてもらってる稼ぎが増える分だけ、多めに故郷に税を納めたから、あたし達の評判はかなり良くなった。金って強いわね。ちよろいわ。

まあ、上手くいかないこともあったし、怪我したりもしたけど、幸いにして重篤な怪我は負わなくて済んでいる。

問題といえば、なんとかとかという勇者のパーティーにちよっかいをかけられ　勇者がベルをくどこうとしたのでボコボコにしたのに、復活してまたベルにちよっかい出してた。あたしにボコボコにされてもまだ立ち向かうなんて奴は本物の勇者だ、って周りが言ってたのにイラッとしたわね。

それに、ソロで活動してるS級冒険者の男に妙に気に入られて、恋愛的な意味で追い回されたりとか。なんでかベルじゃなくてあたしが。ワイルド系っていうか、むさ苦しいっていうか、顔は良いんだけど狼みたいな奴よ。粗野な感じ。良く言えば男らしいになるらしいけど、あたしには野盗にしか見えないわ。何度ボコボコにして橋から川に蹴り落としても、凝りないんだから面倒ね。ほんとその

辺の落とし穴にでもはまって自滅すればいいのに。

さてと、そろそろ行かなきゃ。

あの子に悪いムシついてたら、駆除しないと。ほんともう、わらわらわら湧いてくるんだから。

色々変わったことも多いけど、唯一変わらないのは、あたしはずっとあの子の味方ってこと。

死が二人を別つ^{わか}まで、なんて、陳腐な言葉でしょうけどね。まあ、それまでは、味方でいさせてよね。

…… e n d .

(後書き)

・参考文献

アイリーン・パウア著「第一章 農夫ボド」『中世に生きる人々』
東京大学出版会 1969

中世の教会領の経営を参考にして、ファンタジー舞台に持ってきてみました。一応、参考文献書いておきます。

学術書なんですけど、面白かったですし、色々参考になります。

嫌われ者の味方をして、一緒に活躍するお話なんてのも面白そう
だと思って書いてみましたが、長編にするのは自信なかったので短
編どまりで。

魔法より殴る為に杖を使う魔女とか好きです。強い女の人って格
好いですよ！

普通は、主人公の味方をしてくれるサブキャラを、主人公に持つ
てきた感じです。

あらすじ通り、思いついてから五分後くらいに即興で書いた上、
ほぼ書き下ろしです。二時間くらいで書いたかな？ 見直しは一応
しましたが、気付いたらまた訂正しますね。

読了、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9969x/>

転生者はあの子の味方

2011年11月1日03時16分発行